
アルペジリオ - 優しい商人の話 -

椎乃みやこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルペジリオ - 優しい商人の話 -

【Nコード】

N5385Z

【作者名】

椎乃みやこ

【あらすじ】

「アルペジリオ」

それは、ある世界の名前。

知らない世界の、知らないどこかで紡がれた物語。

様々な種族が暮らす世界の中で、彼女と彼たちには何が映ったのだろうか。

誰もが魔法が使える世界で、少女だけ魔法が使えなかった。血の繋がらない家族を持ち、ある秘密を抱えた少女。

いつの日か失ったものを、取り戻せるだろうか。
これは、ある「嘘つきな少女」の物語。

第1章 嘘つきな青色

もしもし神様聞こえますか？

私の住む世界はどこがおかしくて、とてもちぐはぐです。

たくさんの異質な人達が暮らしていて、穏やかだとは言いきれませんが。

おかげで何度も殺されかけました。

ただの何も出来ない人間だから、不思議な力も使えないけれどそれでも私は

ここで生きていることを、人間であることを、誇りに思っています。

「カナ、寝てるのか？」

少し低めの男の人の声。この声を聞いてシスイの声だとすぐにわかった。

「寝てる……」

ソファアの上で眠っていた私は不機嫌な声で答えた。うつ伏せになつていた体を、ごろりと回転させて仰向けになる。シスイが私の顔にランタンを当てて覗き込んできた。ランタンの光が眩しくて目を細めると、彼はやんわりと微笑んで、眠そうだなと感想を漏らした。

部屋の中は暗い。もともと私達が暮らしているところは、森の中なので電気など通っていないのだ。ソファアのすぐ側にある窓を見たら、さっきまで橙色だった空が黒色に塗り潰されていた。ぽっかりと浮かぶ月とたくさんの星が輝いている。今日も平和だなとぼん

やり思った。

「寝るのなら、自分の部屋で寝ろ」

シスイは、ランタンを私の顔から遠ざけて苦笑した。世話がかかる奴と言わなくても、顔にかいてある。私は欠伸をして体を起こし、ランタンの光で照らしだされたシスイの姿ざつと見た。ぼさぼさの金髪に、汚れた白衣。緑色の目が爛々と輝いているから、先生とおもしろい研究でもしているのだろう。

また私をおいてきぼりにして。

「しー兄こそ寝れば……」

「駄目だ。今いいところだから」

即答したシスイにうんざりした。

正直、私はつまらない。興味深い研究対象を見つけたら、二人だけで研究室に閉じこもってしまうからだ。本業は学者だから仕方ないと思うけど、こちらとしてはおもしろくない。朝から晩まで先生といろんな実験をして、会話もそればかりでもちろん私はその中に入れない。食事もろくに摂らないし、先生なんかそれすらも忘れて倒れてしまうことがある。

やめてなんて絶対言えないけど、限度つてもものがあると思う。

「ふうん」

文句など一切ださずに、私は曖昧な相槌を打った。

「そんなに俺と先生が研究することに不満か？」

「……………」

不意打ちだった。凶星だ。

恥ずかしくなって押し黙ったら、軽く笑われてしまった。

この人はいつもそう。私が考えていることを簡単に当ててくる。血の繋がった兄妹でもないのに、人のことを妹扱いして保護者面をするのだ。私だって兄弟は欲しかったけど、どちらかと言うと兄じゃなくて弟の方が良かった。いやでも、この人が弟になっても気持ち悪いだけか。

「なんでわかるのよ……」

「なんでだろうなー」

シスイは適当にはぐらかすと、なれなれしく私の隣に座った。ソファと向かい合わせのテーブルにランタンを置く。ポケットから煙草の箱を取り出したのを見て、私は睨んだ。

「またそんなの吸ってる」

「大丈夫、はまってなんかないさ」

しゅぼつと音がして周囲が一瞬明るくなった。

煙草独特の臭いが鼻につんとくる。

「すぐにやめてよ」

「うん、煙でもカナナに影響するからな」

そういう意味じゃないのに。前々から思っていたけど、この人は自分のことより私や先生のことを優先する性格だと思う。

いわゆる『他人のために犠牲になるタイプ』。

「しー兄は、格好悪いよ」

私の発言にシスイは変な顔をした。

「そうか」

特に質問したりせず、煙草を口に銜える。煙草は大人になってから吸う物だと教わったから、未成年のシスイには似合わない。ちぐはぐで、なんだか変な感じがするのだ。

「最近、元気がないから、先生が心配していたぞ」

「……そう」

先生と言うのは、私を拾ってくれて育ててくれた生物学者のこと。私は捨て子だった。昔の記憶はあまり覚えていない。思い出したくもない。自分の本当の親と思われる人達に手をひかれて深い森の中を歩かされて暗い森の中においていかれて暗い暗いあの森の闇の中に聞こえた音が恐くて金色の瞳が

「カナ」

呼ばれてどきりとした。首筋に冷や汗が流れている。

今は春なのになんだか肌寒い。

「カナじゃなくて、カナラ」

私は気を取りなおすと自分の名前を訂正した。先生からつけてもらった大切な名前なのだ。勝手に変えてもらわないで欲しい。

『カナラ』。それが、今の私だから。

「いいじゃないか別にー」

「シスイさんって呼ぶよ……」

ぼそりややや声を低くして言うと、シスイは物凄く悲しそうな顔をした。

「駄目だっ、絶対に駄目！ しー兄って呼んでくれっ」

「なんでそんなに必死なの……」

若干呆れながらも思わず笑ってしまった。小声でくすくす笑っていたら、シスイが頭に手を置いてきた。私が嫌な顔しているのを無視して、そのまま髪の毛ごとぐしゃぐしゃ撫でてくる。

「いい加減にしてよっ」

シスイの手を追い払うと、残念とにやにや笑った。叩かれた手をひらひらさせてくるあたり、妙に腹が立ってくる。私が睨むと溜息をつき、まだ充分に長さが残っている煙草をテーブルの灰皿に押しつけた。

「怒るなよ」

「またそうやってすぐ子供扱いする」

「子供じゃなくて、妹扱い」

「変態臭い」

シスイはそうかあと不思議そうに首を傾げた。

「カナは家族だからそうなるだろ」

「誰も血なんか繋がってないの？」

「もちろん」

森の中にぽつんとある一軒家。暮らしている人間は、誰一人血など繋がっていない。一人は三十路を過ぎた生物学者、一人はその愛弟子、一人は親に捨てられ拾われた娘。

それは、疑似家族。

私が、私なんかが、その家族の枠の中に入ってもいいのだろうか。

私が捨てられた本当の理由を、彼らは知っているのだろうか。
深い森の中、聞えるのは低い低い雑音と似ているあの音。
あそこで見たものを、彼らは見たのだろうか。

本当は、私はあの場所で

いけないであれがくるからいけないで

私は頭を軽く振った。

今のことは思い出しちゃいけない。何もなかったことにするんだ。

「俺は今、結構幸せなんだ」

シスイは時折、変なこと言い出す。私が訊く前に彼は言った。

「先生とカナがいるから、幸せだ」

自信たっぷりそう答えられるあなたが、酷く羨ましい。

嘘つきな青色(2)

「カナラ、どうだった」

その部屋は、これでもかと言わんばかりにごたごたしていた。床には大量の紙や書物が散らばり、棚には乱雑に物が置かれていた。白骨化した何かの手が棚から下がっているかと思えば、瓶詰めにした生物がじつと見ているような気がする。大した広さもないのに、よくこんなにも物が溢れるものだ。相変わらずこの部屋はとんでもないところだな。シスイは改めて実感しながら、足で適当に物をどかして部屋に入り込んでいった。

「駄目です、先生。相変わらず元気がありません」

先生と呼ばれた男は椅子に座っていた。分厚い本から顔を上げ、眼鏡の奥の目を細めて笑う。

「シスイはまたカナラに嫌われたようだ」

黒髪、黒目。風を守護とするこの国では、珍しい容姿である。髪を切るのが面倒なのか、伸ばしたまま後ろで一つに縛っていた。シスイと同じように白衣を着ているが、何日間も洗っていないらしい。シスイの白衣よりかなり汚れている。

「先生、痛いところ突かないで下さいよ」

シスイは苦笑した。梳いていない金髪頭をかきながら、カナラは反抗期なのかと尋ねる。

「それもあると思うよ。ちょうど思春期ってやつかな」

「思春期……」

初めて聞いた言葉のように口の中で数回繰り返したが、それでもシスイは納得しないらしい。険しい表情で考え、溜息をついたあと、頭を振った。

「でも、様子はおかしいです。自室に戻ったと思いますが、おそら

く、また」

「ラジオを聞いているんだね」

男はシスイと目を合わせると、同時に頷いた。

「電波なんて届かないはずなのに、カナラは何を聞いているかわかる？」

「ノイズ、じゃないですか」

「だろうね」

男は困ったなとシスイに聞こえないように呟いて、分厚い本をぱたんと閉じた。

男の後ろにある窓は開いていた。換気のために作られた小さな窓で、決して大きくはない。窓から入ってくる風はどこか冷たく、季節は春だというのに冬の気配が残っていた。空は晴れていて雲一つないが、その分、月が大きく輝いて気味が悪い。シスイは丸い月を一瞥し、視線を戻した。先生と慕う男は何も言わない。ただ愛弟子を見ているだけ。シスイは逡巡し、だいぶ間を持たせた。苦々しく吐きだした言葉は、低く、小さなものだった。

「……カナは、純血なんですか」

シスイの発言に男は返さず、代わりにこんなことを訊いてきた。

「カナラは、どうしてあんな所にいたんだろうね」

シスイは俯いて口を閉ざした。それでも男は問いかけを続ける。

「カナラは、どうして綺麗な服を着ていたんだろうね」

「……………」

「まるで、お嫁にいくみたいだったよね」

「先生それは」

はっとしたように顔を上げたシスイに、男は優しく微笑んだ。

「うん、シスイもわかっているんだろう」

シスイが神秘的な表情で頷く。

男は窓の外を眺めながら、今日は月が大きくて不気味だねえとぼやくと

「生贄だろ、あの子」

静かな声で、はつきりと言った。

「カナを見つけたときから、わかっていたんですか」

疑問符がない、どこか確信めいた尋ね方。男は肩を竦めて吐息をつき、困った顔で笑う。

「ひと気のない森で真っ白なドレスを着て、手首と足首を縛られた女の子を見たら、まあ予想はついちゃうけどね。シスイはわからなかったか？」

「いや、あの頃の俺は……。あまりカナのこと、好きじゃなかったので」

興味がなかったんです。もっと早く気づいてやるべきだったかなと、今頃後悔する自分が嫌でたまらないと愚痴をこぼす。男はそうかとなぜか嬉しそうに何度も頷いた。

「でも今じゃ立派な『お兄ちゃん』じゃないか」

「カナは認めてくれませんか」

「そんなもんでしょ、家族って」

「そんなもんですか」

シスイはどこか諦めたように笑うと、表情を引き締めた。先生と呼ぶ男の目を真正面からじっと見つめる。男もシスイから目を逸らさずに、穏やかな顔で見ていた。

「カナは、カナラは、真正銘の純血の人間だから生贄にされたんですか。純血は珍しいから、気味悪がられたのでしょうか。それとも、もっと別の理由があるのでしょうか。夜中にラジオのノイズを聞くのは、それと関係あるんですか。先生、はぐらかすのはやめて、いい加減教えて下さい。カナは何も答えてはくれません。長い時間一緒にいるのに、何も」

男は椅子にもたれかかり、だらしなく足を机の上に乗せた。その拍子に何枚かの紙が散らばったが、別段、気にした素振りを見せない。誰も何も言わず、気まぐれ沈黙が流れる。シスイは下唇を軽く噛み、男が口を開くのを待った。

やがて男はややあと声をあげ、淡々とした口調で話し始めた。

「僕はカナラじゃないから、あの子が何を思つて、何を抱えて考えているか、全てわかることはできないよ。でも、考えることはできるからね。だから、時々、思つんだ。カナラを拾つてシスイとこつちやつて話をして、僕は楽しいよ。毎日が嬉しいよ。でも、カナラはどうなんだろうね。本当に、拾つて良かったのかなつて実は思つてる。あのままにした方が良かったんじゃないかと思つてる」

「それは、見殺しにした方が良かったつてことですか」

男は躊躇いもせず、相変わらず穏やかな顔でうんと返事をした。

「ラジオのノイズ。きつとあの森の中で、似たような音を聞いたんだと思つよ。一種のトラウマだろうね。今でもそれをひきずつているのなら、助けてあげたいと思つ。でも、僕が思つに、彼女は本当は死にたかつた、じゃないのかな」

シスイは黙つて男の言葉に耳を傾ける。窓から入ってくる風が床に落ちた紙を拾い上げ、宙に舞い上げた。ふわりと浮かんで落ちていく紙がどこか幻想的にも見える。外の木々が木の葉を鳴らして、かさかさ音を立てた。今日は風が強い日だ。

「いつたいどういうわけで、彼女のような純血の人間が生まれたのか知らない。今の人間は少なからず、何かの血が混ざっているからね。例え珍しい純血が生まれたとしても、その存在はほとんど言つていいほど必要とされないんだ。他種族の力がない限り、僕たち人間は魔法が使えない。だから、彼女のような魔法が使えない子は、ようするに『いらぬ子』なんだよ」

『いらぬ子』。シスイは口を開きかけたが、男は手を前にだして遮つた。

「カナラは、わかつていたんじゃないのかな。自分がそういう存在であることを認めて、受け入れていたと思つよ。僕はそう思いたくないけれど。あのとき、僕らが彼女を見つけたとき、あの子は泣かなくなつたね。下手したら生贄として、魔物か何かに食われるはめになつていたのに。助けても言わなかつた。僕が抱えなかつたら、あの場にずつといたと思つよ」

泣かなかつたね。男はもう一度繰り返した。男は息を吐くと、沈黙を守るシスイに笑いかける。一言、ごくろうさまと。

「僕の『勝手にカナラの考えていることを想像しちゃえ講座』はここでおしまい。今後の課題としては、どうするべきかわかっているよね。さて、僕はまだやらなくちゃいけないことがあるから、いつも通り徹夜するけど。シスイはどうする。寝るかい？」

シスイは緑色の釣り目を細くして、首を振った。先生らしいなあ
と零して

「もちろん、つきあうつもりです」

心から嬉しそうに、朗らかに笑った。

嘘つきな青色(3)

ゆるして、ごめんなさい、だからかないで、おねがい、こわいの、

あれがくるから、あれがくるの、
だってわたしにはきこえるから、おとがあのおとが
なんだかないているようにきこえるから、わたしまでかなしくなるわ

さみしいっていつてるの、だから、こわいの、
だってわたしまでさみしくなるから

いままで、ずっとがまんしていたのに、はきだしてしまいそう
いやなの

だから、おねがい、かないで

ザーーーーー

ラジオのノイズ音で目が覚めた。なんだかとても嫌な夢を見たよ
うな気がする。たぶん、昔の夢。私がまだ『私』じゃなかった頃の
話。一番忘れたい記憶で、一番忘れられない記憶。

私はベッドから起き上がるとラジオの電源を消した。ここのこと
ろ、なぜだかラジオを聞いていないと眠れない。森の中から電波
なんて届かないし、放送なんて全く聞こえないのに。いや違う、本
当のところはラジオのノイズを聞いているのだ。あれを聞かないと、
なんだかとても恐ろしい。

「朝ごはん作らなきゃ……」

そうでもして無理やりあの男共に食べさせないとまた倒れてしま
う。ベッドから下りて、カーテンを開けると朝日が目に染みた。今

日も快晴のようだ。昨夜は風の音が凄かったから、雲が飛ばされたのだろう。寝間着から普段着に着替え洗面所へと向かう。洗面所には先客がいた。

「しー兄」

「ん。カナ、おはよう」

シスイの目下に隈ができていた。どうやらまた徹夜をしたらしい。洗った顔をタオルで拭き、私に近づくといきなり髪をくしゃりと掴むように撫でてきた。露骨に嫌な顔をすれば、小さく声を上げて笑っている。

「先生からの注文、朝ごはんはコーンポタージュがいいって」

「先生がごはんのこと忘れてないなんて珍しいね」

ぺちり。勝手に頭を撫でているシスイの手を叩きながら言った。

叩かれることに慣れているせいなのか、特に嫌な顔もせず、シスイはにこにこ笑っている。なんだかまるで、私と会話することを楽しんでるみたいだ。

シスイの瞳は緑色。生物というのは、生まれた環境によって体質が変わってくるって聞いたことがある。それならば、きっとシスイは先生と一緒にずっと森の中にいたから、目が緑色になったんじゃないかと思いついた。森の色、決して悪いものじゃないと思う。「俺も好きだから、カナのコーンポタージュ」

「ふうん」

なんだかんだ言って、自分の料理に好意をもってくれるのは嬉しい。少し奮発して、多めに作るうかと考えてみる。それと同時に、そろそろ買い出しに行かなきゃいけないことを思い出した。

「ごはんできたら、ドアの前に置いとくからね。あと、洗濯物はちゃんと出して。先生に体を洗わないと、臭いおじさんって軽蔑するよって伝えといて」

言ってから、我ながら主婦臭いと思った。いや、『家族』の役割で言うところの『しっかり者の妹』と言ったところだろうか。そう考えるとなんだか妙な気分になった。私にこの役割はあまり向いていない

ような気がする。家事は嫌いじゃないけど、私は外でシスイと特訓する方が好きだ。

「しー兄、また特訓やってよ」

特訓と言うのは体術の訓練のことだ。シスイは学者の卵で身体がひよろつとしていくせに、なぜだか体術が非常に上手い。何度か取っ組み合いをしたことがあるけど、いつも負けてしまう。例え向こうがハンデをつけてもだ。

「あー、しばらくの間は無理」

「そう」

予想していた答えだけに素っ気なく返事をする、シスイの手からタオルを奪い取った。

「洗濯にだすから使つよ」

「どつぞ」

朝ごはん待ってるからとシスイは言つて、洗面所を出て行った。

私は顔を洗う。少し前まで川の水を汲んで使っていたけれど、今は地下水から汲み上げているらしい。蛇口を捻れば簡単に水が出る。今までと変わらず綺麗な水で害はないけれど、使うのにためらってしまうのだ。何度も外に行かずにすむようになったのに、この便利さになかなか慣れないでいた。

水で濡れた顔を上げ、目の前の鏡に映る自分を見る。青色の目に、背中まで伸びつつある銀の髪。私はあまりこの髪の色を気に入っていない。銀色なんて中途半端だ。先生のような黒髪が良かったなと思う。もう少ししたら髪を短くしよう。せめて肩ぐらいの長さまで切ろうかな。でもそんなことしたら、きっとシスイが口うるさく言うに違いない。

ふと、自分の青色の目が気になった。

もし、シスイの瞳が森の色なら、私は何の色なのだろうと。

嘘つきな青色(4)

「朝ごはんできたよ」

四角いお盆の上からコーンポタージュとこんがり焼けたトーストの匂いがする。豪華にしようと思っていた朝食は、あまりにも材料が少なすぎて断念。どうして今まで気づかなかったんだろうと返って不思議に思ってしまう。家事は私の担当の仕事だから、食べ物の管理ぐらいしっかりしていたつもりなのに。なんだか悔しい。もう一つ言うなら恥ずかしい。次からは気をつけなきゃ。

ドアを三回ノックすると気だるそうな男の声が聞こえた。これは先生の声だ。どうやら倒れずに無事に生存しているらしい。私は研究室に入っただけいけないことになっているので、ドアの前にお盆を置いた。ずっと前にその理由を尋ねると、教育上あまり良くないからと先生に苦笑されたこと覚えている。だったらシスイはどうなのだろうとつい文句を言っしまいそうになったけれど、あの人は先生の『愛弟子』だから『娘』の私とはまた違うのだ。あまりそういうのは好きじゃない。だから私は、あの二人が研究に熱中し始めるのと、少しだけ不機嫌になってしまう。

こういふ感情を『嫉妬』って言うんだろうな。

ドアの前にお盆を置き、買い物に行つてくると告げると、シスイの声が聞こえた。

「今日はヤシロさんが来ると思うから、あの人に街まで連れて行ってもらえ」

「……了解」

ヤシロと言うのは月に数回やってくる行商人のことだ。外に出ず、ひきこもり生活をしている先生はヤシロにとって格好の客だろう。彼は大陸で生まれた人間ではなく、先生と同じ東の国で生まれたい。ヤシロと言う名前をあちらの国の文字で書くと『夜白』と表記するとか。何か意味があるのかと訊いたら知らねと返されてしま

った。

あの商人が売る物は値段が高い。近くにある街の店の方が安いので、私はできるだけそこで買うようにしている。暮らしている場所が場所だから、場合によっては仕方なくヤシロから買っているのだ。ヤシロと先生は旧知の間柄らしく、それなりに仲がいい。お得意様と言うこともあって、ヤシロが来たときに街まで送ってもらうことができる。

ただし、物を買わなきゃいけないことが条件になっているのだが。ヤシロは月の中頃にやってくる。それも決まって、物に不自由しているところを狙ってだ。本人は商人の勘だと言っているが、私はあまり信用していない。

それ以前に、私は

馬の鳴き声と車輪が止まる音。商人がやって来た。ノックもせず、に我が物顔でドアを開いて、私を見ると清々しいほどの商人スマイルで笑う。

「カナ嬢、みつけ」

「今すぐ引き返して下さい」

私は、この男が大嫌いなのだ。

「それから、私の目の前から消えてもらえませんか」

「うわー、相変わらず嫌われているな。おれ」

茶色の髪に茶色の瞳。人懐っこい瞳で私を見て、とっくに成人を迎えているくせに、子供っぽくけらけら笑う。私は商人を思い切り睨みつけた。どうしてか忘れてしまったけど、私はこの人のことが嫌い。で苦手で、会話するのも嫌なくらい駄目なのだ。

「カナ嬢、あんまりそう嫌うなよ。商売やりにくいんだよな」

「気安くカナ嬢と呼ばないでください。それから、私の名前はカナ嬢じゃなくて、カナラです」

「可愛くねえ、餓鬼」

ぼつりと呟いた商人の言葉を私は見逃さない。黙ったまま睨んでいると、商人はわざとらしい素振りです。両手を上げて「おお、怖い」

と言った。なんだかとてもなく殺意がわいてくる。

「んじゃあ、いつものように商売始めるけど何が足りない？」

「欲しい物はありませんが、街で買います。送ってください」

こんな人に頼むなど本意ではないが、仕方ない。家計のためだ。少しぐらい我慢しなくては。

「じゃあ、何か買っていていけ」

「たまにはタダにしてくれたっていいじゃないですか。商人さん」

皮肉っぽく笑うと、商人はそれこそ子供のように不満そうな声を上げた。

「嫌だね、却下」

「ケチ」

「ケチで結構。おれは商人だから」

むしろそれでいいんだよ、どこか安堵した表情が、いつもの彼らしくなくて奇妙に感じた。

「何、これ」

商人愛用の幌馬車に乗り込み、たくさんの積み上げられた木箱を一つ一つ覗きながら品定めをする。木箱の中は様々だ。食品や衣類だけではなく、薬草や錠剤、本に宝石類まで。森暮らしの私は外の世界をあまり知らない。だからだろうか。ヤシロが仕入れてくる商品にはとても興味があつた。実はお気に入り的小型ラジオも、この人から買った物だ。最初はカメラにしようかと悩んだけれど、声が聞けると聞いてラジオを購入することに決めたのだ。でも、森の中だから電波が届かないことを教えてくれなかった彼を、今でも恨んでいたりする。

適当な衣類と薬草を選んでいると、他の箱より一回り小さい物を見つけた。この箱は勝手に開けては悪いのかも知れない。ヤシロに断りを入れておくことにした。

「これ、開けていいですか？」

馬車の馬を撫でている彼に、箱を見せて尋ねた。

「ん、ちよつと待て」

ヤシロは馬から離れ、身軽に荷台に乗りこむと、箱を見てにやにや笑った。

「カナ嬢は御目が高いなあ。いいぞ、開けて」

役者ぶった台詞に嫌悪感を抱きつつそつと箱を開ける。

「これって」

「最新の拳銃。自動式だ」

黒光りした重たそうな拳銃が箱の中に収まっていた。ヤシロを見上げると顎で触ってみると促してくる。恐る恐る手に取れば、ずっしりとした感触があった。自動式拳銃はとても冷たくて、だからこれが人を殺す道具なのかと妙に納得した。拳銃自体、初めて見る物じゃない。シスイが護身用として携帯している小型の回転式を見たことがあるのだ。あれはこれと違って軽かったから、本当に人を殺せるのかと疑問に感じた。でもこれは、確かに殺害できる道具だ。

「なんだか、悲しくなってきた……」

重たい。でもこれが命の重みだと思おうと軽く思えてくる。

この世界には生き物を傷つけるものが多いと思う。拳銃にしたって、私が使えない魔法にしたって、例えばそれが道具ではなく言葉にしても、この世界はどこかおかしい気がする。

拳銃を握りしめたまま、自分の肩が震えているのがわかった。私は何かに怯えていることに気がついた。何かって何だろう。何に恐怖しているんだろう。

黒、黒色、真っ黒。何も見えない色。

それは暗闇。

「肩、震えているぞ」

ヤシロに手を置かれて、思わず肩が跳ねた。私は自分の肩が跳ねたことに驚いた。だけど、ヤシロは私よりも驚いていた。茶色の目を大きく見開いて、ぽかんとしている。やや首を傾げて心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「カナラ、大丈夫か？」

その行為に思わずどぎまぎしてしまった。

慌ててヤシロから少し距離をおいて頷く。

実際は大丈夫なんかじゃない。未だに拳銃を握っている手はかたかた震えているし、背中に冷や汗をかいているのがわかった。拳銃を放せば体の震えは治まるのではないのかと思う。けど、なぜか手が開かなかった。強く黒い鉄の塊を握りしめたまま放してくれない。私は手の中にある物に、もう一度目を向ける。

ゆっくりと視線を滑らせて、拳銃の先、銃口で目が止まった。

ああ、私は、

「お前に拳銃は似合わないな」

はっとした時には、私の手の中にあの黒い塊はなかった。隣でヤシロが拳銃を片付けている。ぼかんとしたまま突っ立っていると、ヤシロは私を見ずに先程の言葉をもう一度繰り返した。

「お前に、それは似合わない。シスイにでも売っておくさ」

私は何も言わず、その言葉をただ黙って聞いていた。

嘘つきな青色（5）

森を抜けたら街道にでる。街道を一直線に走っていくと街に入る。街の入り口付近には大勢の商人が露店を開き、賑わっていた。滅多に人が来ない森の中に住んでいる私にとって、人がたくさんいる所は少しばかり緊張してしまう。がたがた揺れる幌馬車の荷台から街の様子を窺うと、多くの種族が行き交っていた。

例えば、誇り高い獣の血を受け継ぐ獣人、絶滅した巨人族の子孫にあたる超人、神の使いと崇められた聖族。それから、人間。今ではもう、純粹の血が通っている人間はほとんどいない。

「へえ、魔族がいるぞ」

手綱を握りしめながら、ヤシロはやや興奮を押さえた声で言った。ヤシロの左手の甲が反射して、ぎらりと光る。鉛色のそれ。彼の手の甲をべったりと覆う鉛色は、皮膚そのものだ。ヤシロだって純血の人間じゃない。超人の血が混じった人間だ。この人の皮膚は、鉛と似ている成分でできていると先生が言っていた。異種の血が混じった人間。それがこの世界の『普通』。

「魔族？」

幌馬車の幌をめくって外の様子をしてみるけれど、誰がその人なのかわからない。馬車は移動しているのだ。もしかしたら、通りすぎたのかも知れない。

「わからないや……」

半ば諦めて顔を引っ込めようと思ったとき、ヤシロが声を張り上げて後ろと指示をだした。

慌てて幌から顔をだして覗くと、流れ行く人の中で赤い髪の女人を見つけた。遠目で見てもその人の姿だけ、はっきりと目に映る。なぜ今まで気づかなかったのかと不思議に思うくらいに、とても目立っていた。赤いのは髪だけじゃない、瞳の色も真っ赤だ。

あれは、血の色。

「魔族は夜行性って聞いたんだけどな。昼でも活動する奴はいるのか」

「綺麗な人……」

「魔族と聖族はべっぴんが多いからな。骨抜きにされるなよ」

おちよくるように言ってきたヤシロを見て、私はにやにや笑いを返してやった。

「鼻の下を伸ばして見ていた癖に、よくそんなことが言えますね」

ヤシロがぎよっとした。凶星なのかどうかわからないけど、顔が真っ赤になっている。

「……お前っ、大人をからかうな！」

「ヤシロさん顔赤ーい」

「笑っんじゃねえ！」

慌てて弁明しようとするヤシロがおもしろくて、つつい私は大声で笑ってしまった。

そういえば、大声をだして笑ったのは結構久しぶりかも知れない。最後に笑ったのって、いつだっけ。いつだろう。

今度は人を見るためではなく、空を見るために顔をだす。空はとも綺麗な水色をしていた。風にゆっくりと流されて行く雲を見ながら私は考えてみる。思い出してみる。

でも、なぜか思い出せなかった。

私はヤシロから商品を買わない代わりに、店番を手伝うと申し出た。断れると予想していただけに、あっさりと承諾されてしまったものだから心底驚いた。何か裏があるんじゃないかと思いつつ、街まで連れてってもらえたのはいいんだけど。

「お客、来ない……」

幌は全て取り払われており、今は商品が見やすいように木箱の蓋は開けられて並べてある。荷台に座ってぶらぶら足を揺らしながら、私は昼食のサンドイッチを口に入れた。

「つまんない」

ヤシロは行くところがあるからと言って、どこかに行ってしまった。一人、行き交う人々を眺めながら溜息をつく。だいたい、何も言わないヤシロが悪いのだ。店番なんて初めてなのだから、少しぐらい客が寄ってくる方法とか教えてくれればいいのに。

「ヤシロのいじわる」

彼を呼び捨てにして悪態をついた。その後、彼が呆れた顔でやってくることに期待しながら周りを見渡してみるけど、それらしい姿は見かけない。私は舌打ちをするとごろんと仰向けになった。見上げた先に空なんかない。あるのは、幌馬車の天井となる梁。

「ばーか、ばーか。ヤシロの馬鹿」

我ながらガキ臭いと思いつつ、歌うようにその台詞を吐いてみる。言った後、妙におもしろくなってきてヤシロの歌でも作ってやろうと思いついた。何かの替え歌にしようか。そして、帰ってきたヤシロを困らせてやるんだから。そう考えるとなんだか楽しくなってきた。

残りのサンドイッチを頬張って、私は起き上がった。

起き上がったら、目の前に赤い髪と瞳を持った女の人が立っていた。

「……………」

いつのまに荷台に乗ってきたのだろう。どうすればいいのか対応に困ってそのまま固まっていると、彼女はくすくすと笑いだした。ふっくらとした桃色の唇、整っている綺麗な瞳に、ふわりとした柔らかそうな真っ赤な髪。そして、夕日よりも濃い、血液と同じ色をした瞳。

妖艶。その言葉が彼女にとっても合っていた。

「こんにちは、小さな商人さん」

透き通るような声を聞いて、思わず姿勢を正した。この人、ヤシロが言っていた魔族だ。遠目から見てもそうだったように、綺麗な人である。同性の私でさえ見惚れてしまつくらいに。

「えっと、な、何をお求めですか」

声が裏返っている自分に嫌悪をしつつ、すぐさま立ち上がって尋ねた。彼女を直視できず、どうしても顔から目を逸らしてしまう。初めてのお客さんだから逃しちゃいけないのに。何やっているのよ、私。

「そうねえ、一つ訊いてもいいかしら」

「え、はい。どうぞ」

「あなたは、売り物なの？」

今、この人、とんでもないことを言った気がする。

私は逸らしていた目を彼女に向けた。

彼女は顔色を変えず、同じ笑顔を保ったまま私を見ていた。

その微笑に悪寒を感じてしまった。

「冗談を言わないでください。私はただの売り子ですよ」

「へえ、そうなの？」

彼女は一步近づき手を伸ばしてくる。鋭く長い爪を見て、私は身を引いた。

「そんなに怖がらなくてもいいじゃない。別に取って食おうと思っているわけじゃないのよ」

「ごめんなさい、悪いですがそうとしか思えません」

後ろのベルトに取りつけてあるナイフの柄をそつと握る。ナイフの使い方はシスイに教わった。もし、食われそうになったら、容赦なく相手を切りつければいい。

私は、静かに息を吐く。瞼を閉じたのは、ほんの刹那。

大丈夫。感情を押さえつけることは慣れている。

昔、やっていたことと同じことをすればいい。

彼女から一步引き、相手の出方を見る。睨みつけると、彼女は優しく笑ってこう言った。

「あたし、あなたのこと好きだけど嫌いだわ」

笑顔と釣り合わない矛盾している言葉。

笑っているのに優しく微笑んでいるのに、なぜか安心できない。

「どういう意味ですか……」

「どついう意味って、そついう意味」

「あなたに、好かれようと嫌われようと関係ありません」

「それ嘘よ。今、あなたは嘘をついたわあ」

私は顔を顰めた。似たような言葉を、前にも聞いたことがあるような気がする。

誰だつ。誰が、言っていたんだつ。

「いつもそつやって嘘をついているのね、嘘つきな商人さん」

「いつまで自分に嘘ついているんだ。この嘘つきめ」

思い出した。忘れていた。私、だからあいつのこと嫌いだったんだ。

本当のこと、言われたから。先生にもシスイにも隠していたのに、簡単に見破つてきたから。

あんなやつなんかだいきらい。あんななんかだいきらい。

「何の話ですか」

彼女はまあとわざとらしい声を上げ、頬を両手で包みこむようにして再び笑つた。

「まあ、そつやって誤魔かす。そんなことをしているから、『本当』を忘れてしまうのよ。とつても久しぶりに人間臭い匂いがしたから、どんなのこなつて思つて来てみたのに。全然、全く、面白くない。歪んで崩れて捻くれて。綺麗じゃないわ。美しくないわ。かわいそつな子」

どこか歌うように、彼女はそんなことを言い始めた。彼女が動くたび、群青色のワンピースがひらひら揺れる。スリットから艶かしい太股がちらちら見えて、なんだか見ちゃいけない気がした私は慌てて目を逸らした。

「私の何がわかるつて言つんですか」

低い声でぼそりと言り返す。

初対面の人に、そんなことを言われる筋合いは全くない。

「ねえ、もしかして、貴女は純血？ それって、とーっても危ないことじゃなあい？」

私は何も言わなかった。彼女を睨みつけるだけで精一杯だった。純血の人間だから何。何が言いたい。軽蔑されて、下手に同情されて、かわいそうと言われたことは何度もあった。かわいそうなんて言葉だけ。結局、最後はいらぬもの扱いされて捨てられた。私の手を引いたあの人たちから、温もりなんかこれっぽっちもなかった。

うそつきなのはあっちの方だ。

「本当はわかつている癖に、だんまりをするのね。でも、否定をしないってことは、やっぱりあなたは純血ってことかしら。あのね、かわいそうな子。せっかくだから教えてあげるわ。珍しいものは、高値で売れるってこと、知っている？」

「それが、何」

「だからあたしは売り物かって訊いたの。貴女、連れがいたでしょ。馬車から一緒に見ていたのを知っているわ。その人が貴女を売るのかと、てっきりそう思っていたんだけど」

嘘つきな青色(6)

「遅い」

「悪い」

とんでもなく短い会話のやりとりだ。

ヤシロが帰ってきたのは、魔族の女の人が去ってから三十分ぐらいたってからのことだ。私は仏頂面で膝を抱えて丸まるようにして、荷台に座っていた。私の不機嫌な様子を見て、予想通りヤシロは呆れた顔で溜息をつく。

「不機嫌になるな」

「うるさい」

荷台に上がり、後ろに積みあげてある木箱の中を一つ一つ確認していくとまた溜息をついた。

「全然、売れてないじゃないか」

話す気なんてなかった。

黙っていたら、あいつはいきなり私の頭を撫でてきたのだ。

「……っつ!」

恥ずかしくなって顔が熱くなった。私はヤシロの手を振り払い、睨みつけた。きっと私の顔は真っ赤だろう。何しろヤシロが楽しそうに、にやにや笑いながら私の顔を指差したからだ。

この人は、出会ってすぐに見破ったのだ。何の躊躇いもなく、私を嘘つきだと言いつつ放った。

だから私はこいつのことが大嫌いなのだ。

嫌い、大嫌い。大嫌いっ!

「ほらそう赤くなるなって、おれの用は終わったから次はカナ嬢だな。どこに行きたいんだ?」

「いっばいです」

「もっと具体的に」

私は膝を抱えたまま、小さな声で行きたい場所をぽつぽつと行っていく。ヤシロは聞きながら、そこよりもここの方が安い、質がいいなど言ってきた。助言なんていらぬ。はつきり言って余計なお世話である。ほっとけ。

「そんじゃあ、いつちよ向かいますか」

「お願いします」

心を込めずに言うと、今度は頭をはたかれた。

「何するんですか」

「お前さ、それ止める」

「何を」

「わざとらしい敬語を使うな。しかも、嫌いな奴にしかやらないだろ」

私は何も言わず俯いた。ヤシロが手綱を手に取り、愛馬に軽く話しかけた後、車輪が動いて荷台が揺れた。がたがたと車輪が回り、馬車が動き出す。

「また、見破られた……」

絶対にヤシロには聞こえない小さな声で呟いた。

私の足元に何かがぼとりと落ちた。丸い、円のような染み。ふと気になって、そっと自分の目元に手を伸ばしてみる。それは生温い液体だった。

ああ、どうして私は、泣いているのだろう。

別にあの魔族のお姉さんの言葉を鵜呑みにしているわけじゃない。ただ、あの人の言葉が少しばかり気になっただけで、頭にひっかかったわけで。ヤシロのことは大嫌いだけど、信用していないわけじゃない。大嫌いだけど、先生と仲いいし、悪い人じゃないから。

「……………」

なのに、私は自動式拳銃を握りしめていた。

ヤシロはそのことに気づいているのかそうじゃないのか、それは

わからない。わかることは、私がこれを手に持っていること。人を殺す道具を、しっかりと握っていること。

彼は鼻歌を歌っている。機嫌がよさそうに歌っている。いつもと同じ、特に変わりもなく幌馬車が動いている。私は幌をめくって外の様子を見た。街道を走っている馬車から、ぽつぽつと何人か見かけたけれど、街の商店街よりも賑わってはいない。

私は顔を引っ込めて、隣に置いてある荷物を横目で見た。食材に衣服に、食器類に。ついでに本も買ってしまった。纏められた荷物の中に一つだけ紙箱がある。その長方形の箱は他の箱とは違い、可愛らしい絵柄が描かれていた。私は箱を引き寄せて、改めて中身を確認した。

「これ、本当にいいの？」

それは、クマのぬいぐるみ。箱から取り出して膝の上に乗せてみる。ふわふわの柔らかい毛並みに、垂れ目の黒い瞳が愛らしい。首元につけたチエック柄のリボンがお洒落だ。

「ああ、クマだろ？ いいよ、くれてやる」

ヤシロは馬車の運転に集中しているのか、こちらを見ずにさらりと言った。

「高いでしょ」

「ガキがそんなこといちいち気にしてんじゃねえ。ありがたく受け取れよな」

「私、いらない。こんな子どもっぽいもの」

「ガラスにへばりついてまで、見ていた癖にか？」

本当のことだから、何も言い返すことができなかった。膝の上に乗せたまま、クマの頭を撫でてみる。森暮らしの私はおもちゃに触れる機会が少ない。ぬいぐるみは新鮮で、なぜか懐かしくて。片手はそうして頭を撫でていたけれど、もう片方の手は拳銃を握り締めたままだった。

黒い、鉄の塊。最初に触ったときのような震えはなかった。ただ、拳銃を見ていると、どうしても視線が銃口に向いた。この道具の使

い方も知っている。小型のものになるけれど、安全装置の外し方を一度だけシスイに教えてもらったから。

わかっている。私が『カナラ』と言う名前を貰っても、先生とシスイと『家族』となつて暮らしても、本当のところは、何一つ変わっていないことぐらい。

自分に嘘をついていることぐらい。

自分が空っぽなことぐらい。

知ってるよ、ずっと前から。

この感情も、きつと嘘なんでしょうね。

演じているだけで、偽っているだけで、実際は何も感じていないのね。

「お礼ぐらい、言え」

「……ありがとう」

感情をこめず棒読みで言った。ヤシロが怒るのではないかと思い、彼を見ると、背中を向けたまま何も言わず進行方向に頭を向けていた。顔はこちらを向いていないので、表情はわからない。でも、きつと今のヤシロは私と同じ無表情じゃないのかと、そう思った。

私はクマのぬいぐるみを抱きしめて、ごろんと寝転がった。自動式拳銃とクマのぬいぐるみ。なんともおかしな組み合わせである。

「先生の家まで、あとのくらいかかる？」

「小一時間ぐらいかな」

肩越しに振り返り、寝転んでいる私を見てなぜか笑った。

「寝てる。疲れただろ」

ヤシロの茶色の瞳。シスイの色は森の色。じゃあヤシロの色はいつも道を見て馬車を走らせているから、きつと道の色だ。勝手にそんなことを思いついて、私はゆっくりと目を瞑った。

がたがたと馬車が走る。がたがたと荷台が揺れる。横になって木の床に耳を当てれば、車輪が動く音が聞える。一定のリズムで、永遠に続くんじゃないかと錯覚してしまいそうになる。

変わらない音、変わらないもの。それはどことなく、あのラジオ

のノイズに似ているような気がした。

まどろみながらふと思った。どうしてヤシロはこちらを見たのに、私が拳銃を握っていることに気づかなかったのだろう。あえて、黙っていたのかな。そんなのヤシロらしくないね。

思考が鈍くなる。体が沈む感じがする。私は、眠りに落ちていく。

嘘つきな青色（7）

私が住んでいた町は、とても大きな町とは言いい切れなかった。

いつも誰かがどこかに出かけて、帰って来ない方が多かった気がする。例え帰ってきてもぼろぼろになって、足や腕がなくなっている人もいた。大人は少なかった。子どもはもつと少なかった。老人なんて数える程度しかいなかった。

子どもだろうが大人だろうが、関係なく訓練していた記憶がある。例えば剣の握り方、例えば罫の作り方、例えば魔法の使い方。町を裕福にするために、いつか幸せになるために、みんなみんな頑張っていた。

私は魔法が使えなかった。全くできなかった。魔法を使えるようにするために、変な薬が入った注射を私の体に無理やり打たれたこともあった。拒絶反応で体が痙攣して吐血して、しばらくの間動けなくなった。押さえつけていた大人たちの失望したあの目が、今でも怖い。

だから文字通り『いらぬ物』だった。どんなに他の子と比べて剣が上手でも、文字が綺麗にかけても、私はいらぬ物で役立たず。軽蔑されて、笑われた。歩いていたら後ろから突き飛ばされたこともあった。石を投げられたこともあった。直接殴られるのは、とても痛かった。

そして、私の両親は毎日喧嘩をしていた。

いつだったか、川の水で顔を洗っていたら、いきなり誰かが私の頭を水の中に押さえつけてきた。死ぬのかなって思った。このまま窒息死してしまうのかなってそう考えた。それでもいいと思っていたのに、私の体は思っていることと全く正反対のことをしたのだ。近くにあった石を握りしめて、押さえつけてきた人の頭を殴った。

何度も何度も、鈍い音と感触がした。

やがて動きを止めたのは、手が真っ赤に染まって、その人が私の父親とわかったときだった。

その日から、二人とも私の存在を否定するようになった。会話も食事も何もなかった。家にさえ入れてくれなくなった。仕方無く、私は毎日を外で過ごした。

ある日、教祖と名乗る偉い人がやってきた。その人はかわいそうな町に『良いこと』を教えてくれた。

この町には守護神がおりません。守ってくれる風の神の気配がどこにもいないのです。皆、神を呼びましょう。そうすれば、この町は幸福で満たされるでしょう。ただ、神はとも神聖なる御方なのです。私達様々な人種の血が混じった人間では、神はおいではありません。だが、幸運なことに純粋な血を持つ者がいると聞きました。その町人を神に捧げましょう。神はきつと喜ぶはずです。

周りの人が私に優しくなった。両親が笑いかけるようになった。

それが全部偽りだと言うことは、最初からわかっていた。

その頃だろうか。それとも、もっと前からだろうか。私は物事に對して何も感じなくなった。

何を言われても何も感じない、花を見ても何も思わない、食べ物を見ても食欲がわかない、太陽を見ても、月を見ても、空を見ても、ただ、そこに在るだけと思うだけ。ただそれだけ。

大切なものを、どこで置いてきてしまったのだろうか。

お別れの日。人々はそれをとて綺麗だと言った。白色のドレス、煌びやかな装飾品。お嫁に行くみたいだねと誰かが言った。右手には母親が、左手には父親が、私が逃げないようにしっかりと手を握って、教祖様が指定した場所へと歩いて行った。

深い森の中で手首と足首を縛られて、おいてきぼりにされた。あの二人の口から、別れの言葉なんてなかった。暗い暗い森の中。私

は何も言わず、何もせず、ただ暗闇を見つめてみた。世界は夜で、何もなかった。

何もなかったはずだった。何もなければよかった。それなのに音が聞こえたのだ。何かはどこかで低い唸り声を上げていた。私はそれが嫌だった。押さえていたものが、なくなったと思ったものが、全てでてしまいそう、吐き出してしまいそう、どうしようもなかった。誰もいないはずの森の中で、私はひたすら喋り続けた。もう、ここにはいない両親に向かって。

ゆるして、ごめんなさい、だからいかないで、おねがい、こわいの
あれがくるから、あれがくるの、

だってわたしにはきこえるから、おとがあのおとが
なんだかないているようにきこえるから、わたしまでかなしくなるわ

さみしいっていつてるの、だから、こわいの、

だってわたしまでさみしくなるから
いままで、ずっとがまんしていたのに、はきだしてしまいそう
いやなの

だから、おねがい、いかないで

言葉なんか届くはずなんかないのに。私の口は止まらなかった。

暗闇の中、あの大きな金色の瞳がこちらを見ていた。どこか悲し
そう、で、寂しそうな唸り声を上げて、生物学者とその愛弟子が来るま
で、ずっと私を見つめていた。

あれが、神様なのだろうか。

だとしたら、神様って人の形をしていないのね。

嘘つきな青色(8)

車輪が動く音が聞こえなくなった。目を開けて起き上がり、周囲を見渡す。ヤシロの姿が見当たらない。ふと片手に視線をやると、自動式拳銃を握ったままだった。寝ていても、拳銃を握っていた自分に苦笑してしまう。クマのぬいぐるみを抱えて幌をめくって顔をだすと、見慣れた風景がそこにあった。

私が暮らす小さな家。二階建ての家の前で、先生とヤシロが話している。先生が白衣のポケットから札束を取り出して、ヤシロに差し出した。ヤシロは躊躇いもせずを受け取り、枚数を数えている。何だろう。あのお札、結構な厚さだ。

「これくらいでいいかな」

「充分、足りるな。毎度あり、貰っておく」

「いらなくなったら、返してね」

「誰が返すかもつたいない」

どういうこと。それ。

貴女を売るのがと、てっきりそう思っていたんだけど

違うわよ、なんでこんな時にあの人の言葉を思い出すかな。絶対、嘘。違うでしょ、先生がそんなことするわけないもの。でも、貰うとか、いらないとか、それって、私。

やっぱり、私には『家族』なんて必要ないのかな。

「先生」

自分の声が震えていた。声だけじゃなくて、体全部が震えていた。震える足で荷台から降りた。右手には自動式拳銃。吸いつくように私の手の中に存在している。

「先生、どうして」

先生にゆっくりと歩みよる。あの人はいつもの穏やかな顔で笑っ

た。

「カナラ、お帰りなさい。お前に朗報があるんだよ」

私は先生の服の裾を掴んだ。先生はきよんとして首を傾げる。

「先生、私を、買ったの……？」

ヤシロは私の頭を小突いてきた。なんだろうと思ひ、顔を上げると変な顔をしている。

「カナ嬢、何言っているんだ？ お前が大事そうに拳銃を握っているのを見て、先生が買ってくれたんだ。勝手に箱を開けたと思えば、寝ている最中でさえ持っているもんな。そんなに気に入ったのか」
ヤシロの言葉を理解するのに、少し時間がかかった。

「え」

「先生っ！」

シスイが興奮した様子で走って来た。今年で十六歳だったと思う。年齢に似合わず大人びているシスイが、幼子のような無邪気な表情になるなんて珍しい。何かを抱えて森の中を駆け抜けてくる。全速で走ってきたせいか、呼吸が乱れていた。

「しー兄どうしたの？」

「ああ、カナ。帰ったのか、おかえり。ほら、これ見てくれよ」

私と先生とヤシロは、シスイの腕の中にある物を覗き込んだ。

「卵だね、しかも巢ごと」

先生の言うとおり、それは卵だった。鶏の卵よりも大きくて丸っこくて、色は白色だけど汚れているせいか黒ずんでいる。枝や泥を固めて作った巢の中に、卵が三つ行儀良く並んでいた。

「やはり先生の予想は当たっていました。あれは今、卵を育てる時期なんです」

「うん、それは嬉しいけど。……この卵、死んでるね」

先生はまじまじと見つめてから、そつと人差し指で卵に触れた。それから卵を一つ手に取り、生まれてきて欲しかったなあとはつりと呟いた。

「親はいませんでした。卵が孵らないとわかって、捨てたんだと思

います」

生まれてきて欲しかった。声をださずに口だけで動かしてみる。私は望まれていたのだろうか。空っぽな、私が。

「ああ、そうだ。カナラにお願いをしようかな」

卵をシスイが抱えている巢の中に戻して、眼鏡の奥の目を細めて微笑んだ。私はこの笑顔に弱い。とても優しく温かいから。あの二人にはなかった表情だから、自分はどうな顔をすればいいのかわからなくなる。嘘について同じように笑って、誤魔化せばいいのだろうか。

何と訊こうと口を開いた途端、地響きがして地面が大きく揺れた。地震かと思っただけでそれは違った。木が数本横倒しになり、止まっていた鳥が一斉に空へ飛びたつ。ずるずると引きずるような音を立てて、何かがこちらに近づいてくる。

「うわお。もしかしてその卵、諦めてなかったんじゃないの」

口調は呑気だがヤシロは苦笑していた。背中に背負っている東の国で作られた、刀と言う刃物に手を伸ばす。細い刀身が現れ、日光に反射してきらきら輝いた。

「シスイちゃん、協力できる？」

シスイは溜息をつき、すぐに頷いた。お願いしますと言ってから、巢を先生に預ける。

「俺のミスです。行きます」

構えの体勢をとり、やってくる何かを睨みつけた。

「でっかいな」

ヤシロはそれを見上げると感嘆の声を上げた。私も同じように見上げる。木を倒しながら現れたのは、体全体が緑色の鱗で覆われている魔物。赤い舌を出したり戻したりして、長くて太い体を引きずりながらずるずるやってくる。もしかして、これって

大蛇。

「ああああああ……」

かみさまが、いま、わたしのめのまえにいる。

この大蛇は、あの時の蛇と違うことはわかっている。それでも、私は。

泣いているのを止めなくちゃいけない。誰もいない森の中で、本当は泣いていた女の子を助けなきゃいけない。私はもう『私』ではないのだ。

「ごめん」

あの大蛇に言ったのか、私に言ったのか、誰に対して言った言葉なのかわからなかった。

銃声が森の中に木霊した。

嘘つきな青色（9）

もしもし神様聞こえますか？

今、懺悔をしますね。あの時、生贄にされなくてごめんなさい。

本当は、死にたかったです。

嘘じゃありません。

お父さん、お母さん。役立たずで、ごめんなさい。

死ななくてごめんなさい。

でも、私はそれ以上に、今は生きたいんです。

無くしたものはたくさんあるけど

それをまた一つ一つ拾えることができるのなら、とても素晴らし
いことだと思うから。

ここで生きていることを、人間であることを、誇りに思いたいか
ら。

だから、私、決めました。

笑顔で怒る人は怖いと思った。先生に怒られたのは久しぶりだ。

説教なんかなく、床に正座したまま無言の圧力で小一時間ぐらい。

私は動くこともできず、ずっと固まっていた。

「ご、ごめんなさい……」

「心配した。凄く心配したよ、僕は」

「本当、ごめんなさい……」

俯いた途端、先生の溜息が聞こえた。おそろおそろ顔を上げると
呆れたように笑っていて、ソファアに座ってもいいお許しを貰える
ことができた。私は痺れた足を無理矢理動かしながら、へばりつく
ようにしてソファアに座る。いや、実際は横になって転がった。

「えっと」

撃った後、大蛇が憤怒したのを覚えている。やっぱり私に襲いか

かつてきて、大きな口を見たとき、これで本当に食われるんだなと思っただ。それから首筋に鈍い音がして視界が真っ暗になった。

「カナラがその場にいたらややこしいことになりそうだから、ヤシ口に気絶させてもらった」

「そうなんだ……」

首の後ろあたりが痛い。きっと手刀でもやられたのだと思う。

「大蛇は、どうなったの？」

「死んだよ」

平坦な声であっさりと言った。私は先生を思わず凝視してしまっただ。

「シスイとヤシロが解体してる。研究できそうな物は保存して、売れそうなものは売るつもり」

「そっか……」

「悲しい？」

先生は寝転がっている私の横に腰を下ろして、やんわりとした表情で訊いてきた。

今までの私なら嘘をついて頷いていた。

「何も、感じません」

私は正直にはつきりと言った。嫌われるんじゃないかと思い、戸惑いながらも先生の黒色の瞳を見る。先生の黒は夜遅くまでずっと研究し続けたからとそうだったんだと、また勝手に思いついた。熱中しすぎてそれしか見えなくなったから、他の色が逃げていったんだ。

それでも先生の黒は、とても優しい。

「カナラは感受性が低いのかな。あるいはその逆かも」

私が嫌う銀色の髪を撫でながら、先生はいくつか質問してきた。

「太陽を見て何を思う？」

「眩しい」

「水は？」

「飲み物」

「神様は？」

「崇められているもの」

「僕は？」

「先生」

「シスイは？」

「しー兄」

「ヤシロは？」

「嫌い」

先生の口が止まった。しばらく何かを考えて、微笑しながらこんなことを言った。

「家族は？」

「……好き」

「よろしい。じゃあ、ここは格好良く断言しよう。僕はカナラを捨てないよ」

こういう時なんて言えばいいのだろう。言葉に迷っていると、先生はまた質問をしてきた。

「僕は？」

「格好いい！」

「手伝えっ！」

手も顔を服も血に染まったヤシロがドアを開けて入ってきた。私と先生が座っているソファーに近寄り、解体用のナイフを先生に向けて笑う。なぜだか頬が引きつっていた。

「あれ、でかすぎだ。弟子は自分の分だけやって、おれの手伝い一つもしてくれねえしな」

「ヤシロ、家が汚れるから出て行ってくれないか」

「お前なあ！」

体を洗うことを面倒がるくせに、汚れるから近づくなと先生は言い出した。ヤシロは仕留めてやったのは自分だから、少しは手を貸せと要求してくる。大人げない二人の言い合いに困っていると、白衣に点々と血をつけたシスイがドアの前に立っていた。私に手を振

っている。こちらに来いと口を動かしていた。

「……………」

ちよつと行くべきかどうか迷ってしまった。言い争いをしている二人を無視してシスイの傍に行く。血はついていただけで、ヤシロほど酷くはなかった。やはり、普段から解体に慣れているからだろうか。それでも汚れていることには変わりないので、シスイの白衣を引っ張って文句を言うことにする。

「汚れ、取れないと思うけど」

「あー、ごめん」

笑顔で謝れても納得いかない。シスイに怒っても白衣が綺麗になるわけじゃないから、それ以上、言わないことにした。新しい物を新調しようかと考えていたら、彼は私の手を引いてドアを開けて外に出ようとする。少しだけ血が手についたけど、特に何も感じない。シスイがそれに気づいて慌てて手を離れた。

「うわ、悪い。ついた」

「いいよ、気にしてないから」

血から連想するものといえば何だろう。『赤色』の魔族のお姉さんかな。

「用って何？」

「先生にお願いをされたら」

ドアの外に置いてあるバケツを拾い上げ、その中から小型のシャベルを取り出した。

「卵のお墓作ろう」

お墓。その言葉を小声で繰り返して

「大蛇のは？」

疑問に感じたこと問うと、シスイは苦笑した。

「大きすぎて作れないな」

さくつさくつ。地面を掘り起こす音が森の中に響く。私とシスイは河原に近い場所に、お墓を作ることを決めた。大型のシャベルでも持ってくるかと訊かれたけど、こういう淡々とした作業は苦ではないので構わずやり続ける。二人で掘り起こしながら、近くで流れる川の音を私は聞いていた。水の音。私はあの中に頭を押しさえつけられたのだ。息ができなかつたなあと他人事のように思い出す。

「このくらいでいいだろ」

兄弟一緒が良いという話がでたので、同じ墓の中に埋めることにした。穴を掘る手を止めて卵をそっと持ち上げる。丸くて大きな卵は、文字通り冷たかった。

ああ、死ぬってこういうことなのか。それは少し、嫌かもしれない。

三つの卵を穴の中に入れて土を被せた。土に埋まって姿が見えなくなる卵を見ながら、私は呟いた。

「あの人達のお墓、あるのかな……」

「あの人達って？」

呟きが聞こえたらしい。スコップを動かしながらシスイが訊いてくる。

「本物の両親」

シスイの手が一瞬止まった。

また動き出してしばらくしてから、私の顔を見ずにふうんと言う。「死んでいたら、あるんじゃないか」

「かもね」

あの町はどうなったのだろう。あの神様はどうしたのだろう。

教祖様は、町人は、あの二人は。

空を見上げて考える。空はとても綺麗な青色。同じ色を見たこと

がある気がした。

「そうだ。私さ、決めたことがあるの」

土を全て被せた後、小石積み上げて墓標代わりに置いた。手についた土を払って立ち上がる。シスイも立ち上がって、小さなお墓に目を瞑って黙禱を捧げた。ゆっくりと瞼を開けば

「私、商人になるよ」

自分の声が落ち着いているのがわかった。

「いろんな人に会って、いろんな人とたくさん話したいの。無くしたものはたくさんあるけど、それをまた一つずつ見つけられることができるのなら、それはそれで幸せなんだと思う」

空の色を見て思い出した。そうか、あの色は私の瞳と似ているのだ。空は簡単に色を変えるから、もしかしたら本当の色などないかも知れなくて、忘れていくかも知れない。ころころ変わって何が何だがわからなくなって、だから違う色になる。違う色を演じて自分を作っている。

それってさ、嘘つきだよな。

だとしたら、空は嘘つきの色。空はきつと私の色。

「そっかー、それはそれで寂しくなるなあ」

「嬉しそうに聞こえるんだけど」

「妹が旅に出るんだよ。笑って見送らなくちゃ」

シスイは本当に、私が言っただけのことを簡単に言うから卑怯だと思う。

私の兄と名乗る人は、どこにでもあって私が一番聞きかかった言葉を言ってくれた。

「行ってらっしゃい」

嘘つきな青色（10）（後書き）

第一章完結です。

ここまでお付き合いくださり、ありがとうございます。

この話自体、今から数年以上前（数字を数えるのも怖いくらい）に書き上げたもので、読み返すのが恥ずかしいほど文章が拙いです。それでも非常に思い入れが深い作品です。何度も続きを書こうとし、挫折し、練り直し、書き加え、時には削ることもありました。

絶対になんとしてでも、彼女の物語は書き上げようと決め、今もこうして低速ながらもあれこれ動いています。

これは彼女にとっての第一歩です。

これからどうなるか、見守っていただけると幸いです。

第2章 橙色の彼女（前編）（前書き）

そうして少女は旅に出る。

失ったものを、もう一度見つけるために。

第2章 橙色の彼女（前編）

かわいそうな白と黒

おいてきぼりが恐くなり

四つの人形散りばめた

一つの人形 水の底

二つの人形 炎に焼かれ

三つの人形 風と踊り

最後の人形 土に眠る

「おい、どういうことだ」

細く、三日月よりも細長い銀色の刃物が閃いた。黒い血飛沫が上がり、男よりも何倍もの大きさをもつ巨体が横倒しになる。鉄の臭いがつんときて、男は血を払って顔をしかめた。黒い血は暗い森の中でも、月明かりを受けて鮮明に浮かび上がる。木々にしつかりと跡を残し、それをランタンで照らした男の眉間の皺は、ますます深くなるばかりだった。

「増えているじゃないか、魔物」

男の足下に倒れ伏した魔物は、熊と酷似していた。しかし、熊と唯一違うのは

「人間、だよな……」

熊の顔が、人の顔になっていることだ。男は茶色の目を細め、鞘に刀を収めた。

己の後ろに佇む彼に向かって、嫌悪感丸出しの表情で低く言い放つ。

「おい、答える。天使さんよ」

男の背後には青年がいた。茶色の髪と瞳を持つ男よりも、少しばかり幼げに見える。

雪のように白い髪は、かすかな月光を反射させ、闇夜の中でも際立っていた。男の『天使』という皮肉すら、受け止めるような穏やかな表情。どこか人間味に欠けた青年がいた。天使が持つ色にしては珍しい、薄紫の瞳が笑う。それこそ天使の微笑みで、慈愛に満ちた眼差しで。茶色の男を哀れんでいるように。

「そのままだよ、ヤシロ」

「おれの名を呼ぶな」

男は振り向かない。鞘に収めたまま、刀の柄を握っている。

「じゃあ、なんて呼べばいいのか、僕にはわからないな」

「そんなことはどうでもいいから、おれの質問に答えろ」

だから聖族は嫌いなんだ。男は言わずとも顔にそうかいてあった。

「だから、そのままなんだよ」

「その『そのまま』っていうのを、教えてもらいたんだが」

男の頬がぴくりと痙攣する。

「だからね、君の考えていることで合っていると思うよ。たぶんだけどね」

刀が、煌いた。

青年の首筋に当たるか否か、すんでのところで男は刃先を止めた。茶色の目を鋭くし、敵意を露にする。

「おれは気が短い。いい加減にしろ」

「怒るなよ」

「誰のせいだと思っっているんだ、セイク」

「ああ、僕の名前、覚えていてくれたんだ」

場違いにも青年は笑った。少年のような無邪気で無防備な笑みに対し、男の顔は無表情だ。

「斬るぞ……」

「それは困るなあ」

小さな笑い声を漏らせば、薄紫の瞳が真剣みを帯びた。

「だからね、崩壊しているんじゃないかな」

「世界の秩序ってやつか」

「うん、そうだね。まあ、僕が思うに、壊れているのは　　　ずつと前からだと思っけど」

男は刀を静かに下ろした。息を吐き、青年を見据える。

「天使さまがそんなこと言っているのかよ」

「天使だからって、言っっちゃ悪いことでもあるのかい？」

「お前ら聖族にも、秩序つてものはないのか」

「あるさ。ただそれをどう守るかどうかは、僕らしだいってこと。人間だってそうだろ？」

男は今度こそ刀を鞘にきちんと収めてから、大きな溜息をついた。茶色の頭を搔いて、気に食わないのか小さく舌打ちをする。刀を刀袋に収めて房紐を素早く巻きつけたあと、刀袋につけられた帯を肩にかけた。大剣ならさまになるが、刀身が細い刀では背中が貧相に見えてしまう。腰につければいいものを、男はそうすることを好んではないのだ。

「神様はきつといなくなるよ。人間だけの、世界になると思う」

男は何も言わず、青年に背中を向けた。

「帰るの？」

「帰るって言うか、一応待っている奴がいるんでな」

「また子どもを預かっているんだ。男の子？」

「女、すっげえ、可愛くないガキ」

「名前は？」

「カナラ」

橙色の彼女 前編 (2)

わかりません。

誰か教えてください。

手紙の書き方を。

私は机に突っ伏した。握っていたペンが、便箋の上を転がっていく。

「どうしよう、全然思いつかないよ……」

部屋の中には誰もいない。そして、ここは私の部屋ではない。ベッドと机と椅子があるだけの小部屋。保護者がお金をかけたくないのだろう。私の家にはなかった電気が通っているはずなのに、安い部屋だと象徴しているような小さな吊りランプがぶらさがっている。期待した私が馬鹿だった。片頬をくつつけて、溜息をついた。所々傷んでいる机に触れてみる。ざらざらした手触り。使い込んだ木の匂い。でも、私の机ではない。

私は、国の『都』にいた。

風を守護とする国。それが私の出生国。あの小さな町や森の中で暮らしていた私には、『都』は縁がない程遠い場所だと思っていた。初めて訪れた国の中心部。茶色の商人と時々買い物に行く街とは違う、大きな場所。多くの人々が暮らしている場所。

やはり『都』というべきなのだろう。窓に目を向けて細く息を吐いた。夜なのに、外は明るい。人で賑わう声が聞こえる。体を起こして椅子から立ち上がり、窓から身を乗り出して『都』の様子を眺めてみた。二階の部屋から見える都心は、どこかざわついている。昼とは違う、夜特有のあの高揚感。私の心臓がとくとく音を立てていた。

ああ、私、『興奮』しているんだ。

風の国の『都』は、五つの地区に分かれている。北側は学生や学者たちが集う勉学の地区、南側の半分は作物を育て、もう半分は工

場が立ち並ぶ物を作る地区。東側は旅人や外人たちが多く滞在する外港区。西側はこの『都』に生まれ、あるいは移住した人達が住む住宅地区。そして、東西南北の中央にある地区は、神様の町。人々はそう呼んでいる。

神様の町といっても、実際に神様がいるわけではない。四つの地区にはそれぞれ聖堂があり、中央地区にのみ大聖堂がある。あの地区の聖堂は、他の地区に比べて聖堂の数も大きさも違う。中央地区は国政を行い、聖職者たちの住む町と認識されている。他の地区より、格が高い町。

この国は、神官が権力を握っているのだ。

商人になりたいと言ったら、先生が茶色の商人に私を預けると言い出した。私の保護者になった商人は、商人になりたいのなら世界を勉強しろと言った。

私は学校に行ったことがない。訓練所と呼ばれる場所で、武術や魔法を教えられた。

いつだったか。本というものを知りたくて、父に欲しいとせがんだら読む資格がないと言われた。理由は簡単。純血の人間だから。

魔法が使えない血。この世界には価値のない血。生贄にしか、利用されない血。

私は窓から身を引いた。窓を閉めて、椅子に座る。

風の国は他国との揉め事はないが、内乱が絶えない国でもある。十数年前に革命が起こり、王政が廃止された。それに代わって神官たちが国を治めるようになったが、王政復古を目論む王族たちの反乱が起こったのだ。統治していた町や村を『都』に返却せずに、神官の管理下である町を襲い始めた。一部の民は大きな町ほど、栄え、力を得ることができるといふ話を信じ、一つにしようとする町を襲うこともあるという。私の故郷は、狙われた小さな町だった。

それと、もう一つ。

小さな町にやってきた教祖様。あれは、異教徒だ。この国では異教徒に対する処罰は厳しい。先生が言っていた。もし、このことが

見つかったら神官は許さないだろうと。皆、処刑されるだろうと。まだ私があ町の町にいたのなら、それこそ本当に死んでいたのかも知れない。

机にはラジオ。電源は消してある。大蛇に会ってから、ノイズを聞くことはなくなった。教祖様が神様と崇めていたあの大蛇とは違う。それでも、私の中の何かが吹っ切れたんだと思う。

何かって、何が？

きつと、解決はしていない。いや、しないだろう。あのトラウマはなかなか消えてくれない。私は漠然と感じていた。例え乗り越えたとしても、後ろにびたりと張り付くようにして傍にいるような気がするのだ。だから、今は大丈夫だとしても、また同じ状況にあつたら。

きつと、私は。

「おい、帰ったぞ」

ノックもせず、茶色の商人ことヤシロが立っていた。後ろ手でドアを閉め、私を見れば眉を顰める。

「お前、何しているんだ？」

「先生の真似」

先生の悪い癖。それは机に足を乗せること。椅子の後ろ足だけで上手くバランスをとりながら、今の保護者に顔を向けた。

「お帰りなさい」

「ただいま」

ヤシロは私に近づいて、机の紙とペンを見る。

「なんだこれ」

「手紙」

「へえ。偉いな、カナ嬢」

この人に偉いと言われても、あまり嬉しくない。

ヤシロはラジオに手を伸ばした。勝手にダイヤルをいじくれば、耳障りなノイズ音の後に放送局に繋がった。音楽が流れ始める。曲調の速い曲だ。

「祭りの曲か。そろそろ近いからな」

「祭り？」

「お前、この国の民の癖に、祭りも知らないのか」

頭を軽く小突かれた。ヤシロを睨みつけても、やっぱり効果が無い。

「この国の春の祭りだ。これからの一年が平穏であるよう、風の神様に祈る祭り」

「へえ、そうなんだ」

季節は春。肌寒い日もあるが、それでもこここのところずいぶんと暖かくなってきたと感じる。薄着でも出歩けるから、私の上着は旅行鞆に入ったままだ。時々、ブラシでもかけた方がいいのかも知れない。少ない衣服だ。大切に扱おう。しばらくの間、『都』に滞在する予定なのだ。私物の管理はしっかりしておかないと。

「それにしても、ヤシロさん遅かったね」

「ああ、ちよつとな」

視線を逸らされた。私が見つめていると、こちらを向いて笑顔になる。

「気にするな」

はぐらかされた。ヤシロは私の頭を撫でる。兄のシスイと違って、髪をぐしゃぐしゃにしてくる。その撫で方は止めて欲しい。手をはたこうと振り上げたら、避けられてしまった。ヤシロは意地の悪い笑みを浮かべ、手を振って自分の部屋へと行ってしまった。

「……嫌いだもの、ヤシロさんなんか」

この台詞が嘘なのか本当なのか。最近、わからなくなってきた。

「嫌いだもの。先生にもそう言ったんだから……」

先生に手紙を書くことを約束したのに、何を書けばいいのか思いつかない。

「でも、書かなきゃ先生としー兄、心配するもの」

白い紙を指先でそつと触れる。この白い色を、黒い色で書き潰しているのだろうか。白と黒は、昔から対立している色だ。神話にあ

る『白の王』と『黒の女王』のように。交わっても、決してよくなる色ではない。決して、どちらもいい色にはならない。

灰色。私の銀の髪と似たような色。中途半端な、ある意味人間らしい色。

世界は四つ国と五つの種族がある。北は水、東は火、南は地、風は西。四つの土地にはそれらの属性を司る神様がいて、国の民を護っているそうさ。

五つの種族とは、獣人と超人、聖族と魔族。そして、人間。

人間といっても、皆、何かの血が混じっている。そうではないと生きられない哀れな種族。一番哀れで、一番この世界で数が多い。人間はずぶといのだと、先生は笑って言っていた。

神話によれば、天界には光を司る『白の王』がいて、奈落には闇を司る『黒の女王』がいるらしい。天使と呼ばれた聖族は天界から、悪魔と呼ばれた魔族は奈落から、この世界にやって来て、人を助け、または惑わしているというお話。天使や悪魔という言葉が廃れつつある世界で、この話を信じている人間はどれくらいいるのだろうか。それに、そう。私の中で、神様は死んでしまったようなものだから。

それでもこの国には風の神様がいるようさ。中立としてどこにも属さず、どこにもなびかず、『白の王』に寵愛され、七百人の天使を役する男の神様。

「これ、返さない」と

先程から神話について考えているのは、部屋の隅に積み上げられている分厚い本のせいだ。

北地区には国が誇る最大の図書館がある。その国立図書館から、ヤシロが勝手に借りてきたのだ。学校に行かないかわり、本を読んで勉強しろとのこと。読み書きなら先生に教わったし、本なら家にもたくさんあったから文字には慣れてる。だけど、歴史書や神話はなかなか読み進められない。

「家にあつたの、図鑑ばかりだったしなあ」

白黒の写真。誰かが描いた絵図。それだけでも楽しめた。時々、買ってくれた絵本。不思議なおとぎ話。それだけでも私の小さな世界は広がった。理解できない単語もたくさんあって、未だに教えてくれないこともある。だけど、家にある本は嫌いじゃなかった。あの小さな町よりは、多くのことを学べた。

あれこれ考えてしまつてペンが進まない。椅子から離れてベッドに横になった。ラジオから流れる音楽は、ゆったりとした曲に変わっている。これも祭りの曲なのだろう。

心地がいい。

ヤシロの馬車もいけれど、こついうのも悪くはない。

窓にもう一度目を向ける。家々の明かりはついたままだ。町人達は、眠らないのだろうか。

ああ、なんだか私が眠たくなってきた。

眠らない『都』。眠らない人々。その声が、遠くなっていく。

橙色の彼女 前編 (3)

東地区は国の玄関とも呼ばれる外港地区だ。国内や国外から多くの商人が集まる。その商人の一人であるヤシロも、露店を開きに行った。もし、珍しいものを見つけたら、仕入れも考えてみるらしい。宿の前でヤシロと一旦別れ、私は北地区へと向かう。旅行鞆に本を詰め込んで、ひきずるようにして歩いた。

バスという乗り物を初めて見た。話や本で見聞きしたことはあっても、実物を見たことがなかった。バスは『都』と都市周辺の町にしか普及していない。そもそもこの国に、車はさほど浸透していないのだ。一度だけ見たことがある三輪自動車も、ヤシロに教えてもらえるまで車だとは知らなかった。『都』から離れた場所に暮らしている人間には、新しい情報がなかなか行き届かないのが現状である。

赤色の派手なバスに思わず身を竦めた。日光を浴びてぴかぴかと反射する車体は、まるでその大きさを誇っているよう。巨大なタイヤに踏みつけられたら、それでおしまい。人の命なんて簡単に奪ってしまう。魔物よりも、もっと怖い存在のように思えた。そんな想像を巡らせてから、苦笑を忍ばせた。こんなふう生き物に例えてしまうなんて、あの二人の悪い癖が移ったのかも知れない。

運転手さんに乗るかどうか尋ねられ、慌ててバスに乗り込んだ。体と不釣り合いな大きな鞆をひきずっていると、一部の乗客たちに小さく笑われてしまった。自分の顔が紅潮していくのがわかる。顔を見られないように俯いて、目立たない隅っこの座席に座った。

乗車口が閉まって、バスが揺れ、動き出した。窓の景色が流れていく。馬車とは違う流れ方。馬の蹄の音がせず、代わりにエンジン音がする。変わった乗り心地だ。けれど、『都』に住んでいる人たちにとっては、これが日常なのだ。

手を下ろした彼女の指は、人差し指のみに異常が現れていた。他の手の爪は、丸みを帯びた人間のものである。白色の手をまじまじ見つめていたら、私の顔を覗きこんできた。生気で満ちた眼と目が合う。

「あの、いえ、えっと！」

「いいのよ。一本だけこれだもの。尚更、目立ってしまうわよね。ねえ、あなたはどこから来たのかしら。その様子だと、『都』出身ってわけじゃなさそうだけど」

「その、田舎からです」

田舎というか、森なのだけれど。大雑把な私の回答に、質問を重ねることはしなかった。

「ようこそ。風の『都』へ」

彼女は微笑んで、歓迎の言葉を贈ってくれたのだ。

橙色の彼女 前編 (4)

北地区、通称『知識の町』。

国が誇る最大の図書館。国立図書館の圧倒的な本の多さに、ぼかんとしてしまう。

どこに目を、首を、回しても本ばかり。背の高い本棚は私を混乱させるには充分過ぎていた。本の迷路なんて初めてだ。これじゃあ、本当に迷子になってしまふ。案内版を頼りにしながら、おもしろそうなお本がないかと探し歩いた。勉強の本は全て返却した。堅苦しい本はごめんだ。

ふと、狭い通路に視線が向いた。狭い、通路。本棚と本棚の間に見える狭い空間は、酷く、あの場所と似ていた。太陽が恐くて、ひたすら暗闇の中へと逃げ込んだ場所。湿った空気に、生臭い匂い。明るい世界に住む人々には、決して縁のない所。

ただ、友達が欲しかった。

だから、私が勝手に友達と決めたあの子は。

「ねえ、邪魔なんだけど」

背中にかがぶつかった。記憶の片隅にあるあの子の映像がぶつんと切れる。いつまで過去を引きずっているのだろう。もう、あれは昔のことなのだ。終わったことなのに。

体ごと振り返ってみると、積み上げられた本が目の前にあつた。

「あのさ、わたしの話、聞いているの？」

本が喋っている。いや、違う。本が邪魔で隠れて見えないのだ。首を傾げるようにしてその子は顔をだした。女の子だ。眉をひそめて私をじつと見つめている。何やら、怒っているようにも見えた。バスで出会った女性と同じ学生だ。紅色のローブを纏っていた。

彼女の橙色の瞳は、太陽を思い浮かばせる。同色の髪は左右に二つで結ばれていた。浅黒い肌が紅色のローブにとっても似合っていて、

まるで夕焼けを見ているみたい。

「ねえってば！」

「痛っ！」

おもいつきり、足を踏まれた。慌てて横にずれて、通路をあける。

「全く、なんなのよ。あんたは」

「ご、ごめんなさい」

彼女に鼻で笑われてしまった。私を頭から爪先まで観察し始めたかと思えば、何かに納得したように何度も頷いた。

「あなた、田舎者ね」

家は森にあると言えば、さらに馬鹿にされそうな気がする。ここは黙っておこう。

「名前は？」

「え？」

「名前よ。名前！ 初対面の当たり前のマナー！」

いきなり大声で怒鳴られて、私はびくりと肩を震わした。彼女のような人は初めてだ。感情を真つ直ぐに向けられることなんて、あの森では経験したことが少なかった。戸惑っている私に呆れたのか、大きな溜息をつかれてしまう。小声でこれだから田舎者とは、何か呟いている。

「わたしの名はティミー・キャムズ。国立学院中等部在籍。十四歳。属する国は大地。数年前まで鎖国していた国だから、陰鬱な奴らが多いと思われがちだけど、それは大きな偏見よ。そうそう、これもわたし、魔法は得意なんだから。大地の伝統ある魔法も習得済みよ。水の国へ留学しようかとも考えているのよね。でも、あの国はある意味、閉鎖的だし……」

ティミー・キャムズと名乗った少女の顔を、呆気にとられて眺めてしまった。

自己紹介で、よくもこうべらべらとでてくるものだ。

「ともかくっ、それはおいといて！」

「はいっ」

「名前を言いなさい！」

「カ、カナラです」

「なんで敬語なのよ。あなた、わたしと同じぐらいでしょうっ？」

「十四歳だよ」

「あら、同じ年じゃないの。よろしく、カナラ」

彼女は何気なく手を差し出してきた。その行動の意味がわからず、手をしばし見つめて

「握手！」

また怒られてしまった。

「えっ、あ、うん」

手を握れば嬉しそうに笑って、私の腕ごとぶんぶん振ってくる。こういうとき、どういう反応をすればいいのだろう。彼女の動作は一つ一つが大きくて、眩しいほど明るかった。夕焼け色を身に纏った彼女は、それでこそ本物の太陽みたいで、私は思わず目を細めていた。

自然と、笑みが零れていたのだ。

ティミーは手を離して、ふうんと意味ありげな声をだす。

「なーんだ。カナラって、ちゃんと笑えるじゃない。おどおどしているから、てつきり暗い奴だと思っていた。もつと笑っておきなさい。笑った方が得なのよ」

「そうなの？」

「そうなの。笑った方が、何かしらいいことが起こるものよ。覚えておきなさい」

「うん、覚えておく」

私の返事に満足したのか、ティミーは大きく頷いた。

「カナラはここに来て何日目？」

「三日目かな」

「まだ『都』に来たばかりじゃないの。わたしが案内してあげる。彼女の提案に、少しだけ驚いた。

「いいの？ でも、ティミーさん、学校は？」

ティミーの服装に目を移すと、彼女は視線に気づき、スカートを一瞥した。

「生徒は、外出時でも制服を着て歩かなきゃいけない規則なの。だから、これを着ているわけ。今、学校は休みなのよね。ほら、春の祭りが近いでしょ？ それに便乗して、祭りの時期はお休みってことになっているの」

ローブの下のスカートは、チェック柄だ。ズボンしか履いていない私にとって、ひらひら揺れるスカートは不思議な服である。女の子らしい服。あんな服を着たのは、あの時だけだろう。

生贄にされた、あの時だけだろう。

「このわたしが案内してあげるから。その代わりに、ほら、これ手伝って」

積み重なっている本を持ってという意味で、強引に押しつけてきた。苦笑しながら数冊を受け取る。なんだか、勝手に話を進まされている気がしてならない。握手をしたときに片腕で持っていたから、腕力に自信があるのだと思っていた。けれど、それとこれとは話は別のようなのだ。

「何、文句でもあるわけ？」

睨んできた彼女に、笑いながら首を振った。

「ないよ」

あっても言いません。

館内を案内してもらいながら、ティミーの話聞いていた。彼女は勉強をするために来ていたらしい。この本はそれに使った物だと、自慢げに話していた。

「凄いいね、自分から勉強しているなんて」

「そりゃあ、学生だから。当たり前よ」

鼻高々にそう言った彼女は、どこか照れたようにも見える。

橙色の彼女 前編 (5)

「カナラはどうして来たの。見学？」

「本の返却。私の保護者が勝手に借りてきたの。それを返しにね」
背伸びをして、本を目的の棚に収める。ティミーがはしごを持ってきてくれた。

「へえ、カナラの保護者ね。どんな人。そんな言い方をするのなら、家族ではないのでしょうか？」

私は彼女に礼を言っではしごに登った。渡された本を棚に入れていきながら、質問に答える。

「家族じゃないことは確かだよ。行商人なの。私もそれを目指そうかなって思っているんだ」

「あら。それじゃあ、国外にも行く予定？」

ティミーの橙色の瞳が、興味深そうにこちらを捉えていた。

「そういうことになるけど……」

国外に出るには、身分証明書が必要になってくる。売買するときや交渉をするときにも、場合によっては提示しなければならぬ。

私にはそれが無い。そもそも、私には国籍すらあるのか怪しいのだ。異教を信仰していた町の住民は、全て死亡したことになっている。

書類の上では死んでいるのだ。ヤシロは心配がないと言っていたけれど、どうなのだろう。新たな身分を得るために、この『都』に来たことが一つの目的でもある。

「考えているところなの」

本を全て棚に収め終えてから、はしごの足場に腰を下ろした。

「考えているって、どうして？」

「それは」

私は商人になりたいと言った。例え、国籍を取得できたとしても、国外に出るかは決めていない。本当に行商人になるのなら、家族と会えない日が多くなる。国内で行商をするとしても、家に帰ること

は少なくなるだろう。

「カナラが何を決めかねているか知らないけれど、やりたいことをやればいいじゃない」

たくさんの人と会って、いろんな話をしたい。行ったことも見たこともない場所を巡って、無くしたものを集めていきたい。それが、私が商人になる理由。でも、そうしたら家族と会えなくなる。

「そうだけど」

決意が揺らぐ。ティミーは腕を組んで、不満げな顔を露にした。

「なかなか決まらない子ね。自分に遠慮することないのに」

彼女は遠慮をしたことがないのだろうか。不思議そうに私を見ている。

「……あのさ、なんでティミーさんはここまでしてくれるの？」

先程から気になっていることを、思いきって尋ねてみた。

本を戻すことを手伝わされたけど、それでも色々なことを教えてくれた。図書館の案内の他に、おいしい料理や学校での出来事。お勧めのラジオ番組や、流行っている小説。『都』の行事のことも、たくさんたくさん教えてくれた。こうして今も、私の相談に乗ってくれている。

初対面の私に、どうして親切にしてくれるんだろう。

ティミーはきよとんとした。なぜそんなことを訊いてくるのかと、言いたそうな表情だ。

「なぜって、わたしたち友達じゃない」

「え？」

「だから、『ともだち』だって言っているでしょう？」

今度は丁寧な例の単語を強調した。

「え、あ、その」

「何よ、わたしじゃ不満なわけ。それとも、あなたには友達はいないの？」

私は言葉を詰まらせた。うんとも違うとも言えずに黙っていると、ティミーは驚いたように瞬きを繰り返した。少しの間、気まずい沈

黙ができる。ティミーの視線が痛い。はしごに座ったまま、そろそろと目線を下ろすと、なぜか彼女はにんまり笑っていた。

「光栄に思いなさい。田舎者のカナラ。わたしが、あなたの初めての友人になつてあげるわ」

「なあに、それ」

「このティミー・キャムズ。天使になるわたしと友人になれたもの！」

彼女の発言に固まつてしまったのは、言うまでもない。

天使。それは聖族を指す古い言葉だ。時代は変わった。聖族や魔族の存在は認めても、天使や悪魔の存在を疑問視する人たちもいる。聖職者ではない限り、その言葉を口にだす人が少なくなった。だいたい、国の権力者でさえ、天使と悪魔の存在を信じているかさえ疑わしいのに。

それなのに、ティミーは断言したのだ。

自分は、天使になる人間だと。

「もしかして、『後づけ』のこと？」

「そういう捉え方もあるけど、それじゃあ、完璧な天使にはならな
いわ」

『後づけ』。それは、人間が聖族か魔族のどちらから血を貰うこと。過去の自分を捨てる代わりに、新たな生命を得る行為。肉体蘇生の一種だ。記憶や名前を差し出すことを条件に、血を提供した種族の人間になれる。『後づけ』をした人間は、俗に『子』とも呼ばれる。

でも、本物の聖族や魔族にはなれない。生まれ変わっても、人間は人間のままだ。

「それって、どういうこと？」

「やだ。カナラは商人と一緒になのに知らないの？」

そもそも『後づけ』は、聖族が民を守るために、緊急時として使用するものだ。全員を助けるとは限らない。何かの意思が働いたときにしかされないものだと言った。例えば神様、例えば国の権力者

の意味。魔族の『後づけ』となると、さらに稀となってくる。

ティミーはいったい、何のことを言っているのだろう。

詳細を尋ねようと身を乗り出したとき、はしごが揺れた。

「あ」

声が遅れてやってきた。

視界が傾いて、体が宙に放りだされていた。はしごも後ろから倒れてくる。このままじゃ、下にいるティミーが。橙色の眼が大きく見開く。

いけない。逃げて。

衝撃は、こなかった。

落下場所は床の上ではなかった。私は彼女に抱きとめられていたのだ。おそろおそろ顔を上げると、倒れたはしごは私たちに落下することはなく、向かいの本棚に引っかかっていた。

「ティミーさん！」

すぐさま怪我の確認をする。見たところ、目立った外傷は見当たらない。

「この、馬鹿っ」

「ご、ごめんなさいっ」

ティミーは溜息をつき、そして、笑ってくれた。

「あんたって、危なっかしい子ね」

橙色の彼女の手が、私の頬へと触れた。褐色の手は滑らかで温かだ。彼女の手に分かたず重なると、友達の手というのは、こういう安堵する手なのだろうか。

「ねえ、ティミーさん」

「何よ。呼び捨てでいいわよ」

友達がいないの。先程の問いかけに、私は答えることができなかった。事実を言うなら、彼女は初めての友達じゃない。私にも、一応、友達と呼べる相手はいたのだ。私が勝手に決めて、勝手に振り回してしまった子。初めての友達だったあの子は。

「……私、あなたに何ができるかな」

「馬鹿ね。そんなことをわざわざ訊くなんて」
最期はあまりにもあっけなく。嘘みたいに、簡単に終わってしまった。

私は、あの子に何をしてやれたのだろう。

あの子に何を残してあげられたのだろう。

私みたいな人間を大切に思ってくれる人に、いったい何ができるのだろう。

「いらないわよ、そんなの」

ティミーの答えは至極簡単なものだった。

「だって」

夕焼けの瞳が、嘘つきの空色の眼を映し込む。

「そういう質問をする人ってさ」

ティミーがにたりと笑う。どこか私を試しているような、そんな笑顔。

「こつという言葉が欲しいからに、決まっているでしょ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5385z/>

アルペジリオ - 優しい商人の話 -

2012年1月12日23時46分発行